

私の幼児教育論

私は、この四月、十年振りに短期大学の保育養成の仕事に復帰することになった。この十年間、四年制大学の幼児教育学科から保育専門学校に至る保育者養成校にかわり、学生の指導から現職保育者の指導まで参与し、幼児教育の渦中ですごしてきたのだけれど、久し振りに出発点に戻ってみて、私は改めて幼児教育の変貌の姿に隔世の感を強めている。一体、幼児教育の何にそのような変化を認めるに到ったのか、その実態を明らかにする



大 戸 美 也 子

ことが「私の幼児教育論」の主題である。

一、幼児教育の現在

我が国の幼児教育は、この十年の間に質・量の全体にわたって大きな変化を生み出してきたが、中でも最も印象深いことは、個々の事象の変化内容よりは、さまざまな変化が重なりあって、「幼児教育」の概念あるいは「幼児教育」という言葉によって前提としてきた内容を

変えてきたことである。これまで「幼児教育」という言葉によってどのような教育を前提としてきたかといえ、それは家庭外の幼稚園や保育所で専門の保育者によって遂行される健常児の教育のことをさしてきたのではなからうか。「幼児教育」という言葉には、無意識の内

に一定のワク組が用意されていたのである。しかし、この十年間の幼児教育をめぐる変革的な試みは、知らず知らずの内にこのワク組をとりはずし、新たなパラダイムで幼児教育をとらえることを私たちに求め続けてきたように思われる。たとえば、統合保育の興隆は、健常児のみを対象とする幼児教育のワク組に亀裂を入れる働きをしたし、たて割保育、オープン保育の浸透は、年齢・クラスのワク組から子どもたちを解放させ、また、乳幼児の母子関係の研究の進展は、親、特に母親の教育的役割、あるいは家庭における幼児教育の存在を人々に自覚させ、幼児教育の地平線を、幼児教育施設内から家庭にまで拡げる役割を果たしているとみてよいのではないだろうか。このように幼児教育の現在をとらえると、今私た

ちがとり組まなければならない最大の課題は、健常児・障害児を含めて、誕生の時から幼児期全体にわたって、しかも家庭でも幼児教育施設でも共有できる概念の追求であり、具体的にいえば人間を人間に育てる基本的経験の探求ということである。

二、人間を人間に育てる基本的経験

人間は、どのような経験を通して人間になっていくのだろうか。健常児にも障害児にも共通する、また誕生の瞬間からはじめられその後継続して受けることのできる経験、そして、生活の場所を問わずできる経験というものがあるのだろうか。この問に關して、人間の基本的存在様式を洞察して、人間が「関係的存在」であることを指摘した松村（一九五八）の見解はきわめて有効である。彼によれば人間は外界あるいは自己との「関係」を拠点に自己を形成し、人間に必要な言語をはじめとする諸能力を育て、人間が人間になっていくというのである。

このことは、人間が誰でも他者の胎内に宿り、胎児は

母体との交流を基盤として生命を形成していく事実、また出産について外界に出たあともかなりの期間、他者の加護を受けてその生命と人格を育てていく事実からも肯けるところであり、また近年興隆をみている胎児、人間の初期経験の研究あるいは言語習得前のコミュニケーションの研究によっても明らかなどころである。たとえば、パニー（一九八二）は胎児が母親と生理（ホルモン分泌など）、動作、情緒の三つの回路を使って交流をつづけていることを明らかにしているし、スターン（一九七七）も生後3ヶ月頃までに親と子が殆ど同時に相手の出方をよみとり、やりとりのプログラムを作って丁度ワルツでも踊るように母子の間で流暢なやりとりが展開できることを観察している。これらの研究は、人間は、胎内にいる時から人間との「関係」の中に生きていくにふさわしい行動のメカニズムをすでもっていること、またこの行動のメカニズムは成長と共に複雑化して異なる様相で展開することを示唆している。従って、乳幼児期の子どもたちとかわる保育者は、発達によって変化

するさまざまな位相のかかわりについて理解を深め、子どもが今、どの位相のかかわりを展開しているかを素早くとらえ、相手をしながらそのかかわりを充実させていくことが大切である。

そこで、次に乳幼児期のいろいろなやりとりの具体的な姿についてみてみよう。

三、「やりとり」の種々相

人と人とのかかわり、やりとりは、「言葉」によってのみ行なわれるものではない。音声言語を獲得するよりはるか前から、さまざまな手段を媒介に交流が行なわれている。

すでにみたように胎児期には、生理、動作、情緒の三つの回路を通して交流がはじまっており、乳児期には「呼吸」「微笑」「動作」「物」などを媒介とした交流への変化をしていく。そして、幼児期には、これら交流の媒体に「音声」や「言語」も付け加えられ、一層激しく、変化にとんだやりとりを展開していくのである。たとえば、人間の最も初期の交流の仕方として、「空気」を媒

体とする交流がある。これは、赤ん坊と母親あるいは保育者の間でかわされる交流で、赤ん坊がお乳をすっている間、母親がこれを黙って見守り、赤ん坊が一休みすると、今度は母親が子どもに話しかけたり、…これを交互にとつて交流するあり方で、その他赤ん坊の動きや目の動きに呼応して、母親が相づちをうったりする「対話」もこれに含まれる。また、「微笑」を媒介とする交流は、生後三ヶ月以降にあらわれ、母親のほほえみかけに、子どもが同じく微笑でかえす形で展開する交流の仕方である。母子の微笑交換過程を分析した、イギリスの心理学者リチャーズ（一九七一）は、親と子の微笑交換が丁寧な対話と同様の構造をもち、たとえば母親が微笑している間は、赤ん坊は比較的穏かな顔をしており、その内次第に顔がゆるみ、母親の顔から微笑がきえる頃、赤ん坊の顔に微笑があらわれていることを分析している。

また、同じ頃、「動作」による交流も発生することがスターン（一九七七）によって報告されている。これは、母親が子どもに接近すると、これに呼応するよう

に、子どもは親を回避するように頭を横に向けて回避の動作をし、母親がもとの位置に戻すと、今度は子どもの方が接近してくる…というやりとりである。乳児後期には、物の直接的やりとり (give and take) による交流、二歳児になると人形に人の役割を付与して、それとのやりとりへとすすみ、幼児期になると「追いつ・追われつ」活動のように「動き」「動作」「音声」を媒体としたやりとり、またこれらに一定のルールを介在させてやりとりの展開を規則化した「鬼ごっこ」などがある。

幼児期には、この他、やりとりを主軸とするさまざまな遊びがみられるがその明いやりとりの底で子どもたちは複雑な、そして時には深刻な経験をしていることを、社会思想家の藤田省三（一九八七）は「かくれんぼ」の分析を通して、鋭く指摘している。彼によれば、かくれんぼは「さがす」、「かくれる」対極的な役割をとる中で、双方とも「ひとりぼっち」の経験をし、「さがし出す」「さがし出される」経過を通りぬけていく内に「遊戯者としての子どもはそれとは気付かない形で次第に心

の底に一連の基本的経験——対抗しながら相互に救済しあう統合——に対する胎盤を形成していく」（12頁）といわれる。藤田は、かくれんぼというこの最も日常的なあそびに包含されている、人間経験のひな形を抽出してくれたのであるが、このようなアプローチは、日常生活のいろいろな位相で展開される子ども同志、子どもと事物、子どもと保育者とのやりとりの意味を掘りおこす重要な手法を提示しているといえることができる。

すべての子どもを対象とする、誕生から幼児期の生活の全体の中ですすめようとする「私の幼児教育」は、いかにも茫漠としてとりとめがないようにみえるかもしれない。しかし、経験をつんだ漁師がああ途方もなく広がった大洋から各種の魚を水揚げするように、私たちも、何気ないやりとりに秘む豊かな人間経験をよみとる訓練、また同じものの中に異質性を、同じものの中に同質性を見い出す洞察力を身につけていくなら、日々の偶然の出会いの機会を意味ある機会に変えていくことができるにちがいない。そのような努力があつてこそ、「高き

を低みにみただ、低みを高みにみただる」、子どもたちとのやりとりを充実させることができると思うのである。

参考資料

バーニー「胎児は見ている」Non Book 一九八二
Stern, D.: *The first relationship: Infant and mother*, Fontana Open Books, 1977

Richards, M.P.: *Social interaction in the first weeks of human life*, *Psychiatry, Neurologia, Neurochirurgica*, 1971, 74, 35

-42-

藤田省三「或る喪失の経験——隠れん坊の精神史」（『精神史的考察』平凡社、一九八七）

大戸美也子「保育における交互作用」横浜学園付属元町幼稚園 一九八七